明治時代～

『古都の風情と詩的な文化が漂う市民のまち』へ

1868（明治元）年、明治政府の誕生によって、欧米からさまざまな文化が急激に取り入れられました。東京医学校に招かれたドイツ人医師・ベルツ博士が、医療としての海水浴に適した地として鎌倉を紹介。これがきっかけとなり、時の衛生局長・長與専齋（ながよせんさい）の尽力によって、1887（明治20）年には日本初のサナトリウム「海濱院（かいひんいん）」が開設されます。その同年に東海道線、翌々年に横須賀線が開通。古都の風情と、別荘地や保養地としての素質に、交通の便が加わった鎌倉を求めて移住する人々が急増しました。温暖な気候と執筆活動にふさわしい環境を求めて東京から、名だたる文人たちも鎌倉へと移住。彼らはやがて鎌倉文士と呼ばれるようになり、鎌倉の文化的なムードをより濃くしていきました。また、戦後の高度経済成長期に起こった市民運動「御谷騒動（おやつそうどう）」に象徴される文化と自然を守ろうとする市民意識は、鎌倉らしさとして今も受け継がれています。

1869（明治2）年

鎌倉宮（かまくらぐう）

秋の風物詩「鎌倉薪能」の舞台

祭神は護良親王（もりなが）。鎌倉幕府の討幕に活躍しましたが、幕府滅亡後の混乱の中で幽閉され、非業の死を遂げました。明治天皇は親王の遺志をたたえ、幽閉された東光寺跡地に神社造営の勅命を発すとともに、「鎌倉宮」と命名しました。

境内で毎秋開催される「鎌倉薪能（かまくらたきぎのう）」は季節の風物詩として知られ、作家の立原正秋（たちはらまさあき）が、小説『薪能』を著すなど、文士の創作の舞台にもなりました。

金春宗家（こんぱるそうけ）をはじめ一流の演者たちが能や狂言を演じる

鎌倉を深掘り

貸本屋から大学まで。文化復興を担った鎌倉文士たち

1889（明治22）年の横須賀線開通により、古都鎌倉は保養地として人気を博し、多くの文学者が訪れました。関東大震災以降から昭和にかけては、東京から一部の文学者が移住。彼らはやがて「鎌倉文士」と呼ばれるようになり、文芸・文化の発展の一翼を担いました。

戦中の1945（昭和20）年には、久米正雄、川端康成、高見順らが中心となり、切迫する暮らしを打開すべく、自らの蔵書を集めた貸本屋「鎌倉文庫」を開店。空襲警報の合間を縫って客が殺到するほどの人気で、戦後には出版社「鎌倉文庫」を立ち上げました。さらに、有志の市民が光明寺を仮校舎に戦後開校した「鎌倉大学校」（のちに「鎌倉アカデミア」）では、文学者も教壇に立ちます。自由な人間づくりを目指し、多くの若者たちがここで学びますが、わずか４年で閉校しました。

店前に掲げられた鎌倉文庫の看板。作家・里見弴が書いたもの
鎌倉文学館蔵

暗い時代のなか、鎌倉を愛し、描き、文学都市へと高めた鎌倉文士たち。その自由闊達な精神は、かつての鎌倉武士の「独立自尊」の矜持そのものといえます。その精神は現代へ引き継がれ、新世代の文学者たちが活躍しています。

漫画家・清水崑が当時の店の様子を描いた『かし本や鎌倉文庫繁盛図』
鎌倉文学館蔵

1908（明治41）年

旧諸戸邸

住宅街にある明治期の小さな洋館

株式仲買人の福島浪蔵の別邸として建てられ、後に実業家の諸戸清六が所有。1980（昭和55）年に鎌倉市が取得し、子ども会館としても利用されていました。明治期の住宅建築の貴重な遺構であり、ギリシャ建築の様式を取り入れたバルコニーなど、外観の繊細な装飾を見ることができます。

膨らみを持った柱身などにもギリシャ建築の様式の意匠を見ることができる

1916（大正5）年

古我邸

かつては著名人や政治家も住んだ豪邸

鎌倉文学館、旧華頂宮邸と並ぶ鎌倉三大洋館のひとつ。三菱合資会社の専務理事だった荘清次郎の別荘として約15年を費やして建てられ、関東大震災直後の対策会議はここで開かれました。1937（昭和12）年には日本土地建物の経営者・古我貞周が取得。元首相の濱口雄幸や近衛文麿も別荘として利用し、現在はレストランとして活用されています。

設計は旧三菱銀行本店などを手がけた建築家の桜井小太郎

鎌倉を深掘り

日本初のサナトリウムから始まった海水浴

ドイツ人医師・ベルツ博士と当時の内務省衛生局長・長與專齋は、鎌倉を避暑・避寒・保養の適地とし、医療としての海水浴＝潮湯治を推奨しました。鎌倉が海浜保養地として知られる先駆けとなったのは、1887（明治20）年に由比ガ浜につくられた日本初のサナトリウム（療養所）・「海濱院」。潮湯治は決まった時間に海に入ることを繰り返すものでしたが、1885（明治18）年に、長谷にあった三橋旅館が『東京横浜毎日新聞』に「海水浴御馳走」という広告を掲載し、さらに1888（明治21）年には「海濱院」が海水浴客や外国人客を受け入れる「海濱院ホテル」へ衣替えしたことから、瞬く間に海水浴はレジャーとして定着しました。

1918(大正7)年

神霊教鎌倉錬成場霊源閣（旧山本条太郎邸）

関東大震災前別荘建築の希少な現存例

実業家・政治家として活躍し、南満州鉄道総裁を務めた山本条太郎の別邸として建てられました。京都の吟味された資材を用い、京都の大工がその力量を発揮した、優れた京風数寄屋建築です。標高40mの高台にあり、庭からは由比ガ浜が一望できます。関東大震災以前の貴重な別荘建築であり、別荘での生活ぶりが推量できます。昭和57（1982）年に神霊教が取得し、「鎌倉錬成場霊源閣」と名付けられました。

京間が使用された数寄屋造りの大広間。母屋などは平成28年に登録有形文化財に登録された。

1926(大正15)年

石川邸（旧里見弴邸）

作家・里見弴の理想が詰まった邸宅

作家・里見弴が自ら設計に関わった邸宅で、洋館部分は建築家のフランク・ロイド・ライトの造形を取り入れたもの。渡り廊下で繋がった別棟は茅葺きの日本建築で、茶室として使われていました。1936（昭和11）年に里見氏が転居した後は、所有者は数度変わり、一時期ホテルとしても用いられ、石川氏の住宅となった時期もありましたが、その後民間会社の所有となりました。

ポーチが印象的な洋館。
奥の日本家屋とのコントラストも魅力

療養所から衣替えした当時の「海濱院ホテル」

1927（昭和2）年

三河屋本店

戦前の風情が残る老舗酒店＆レストラン

1900（明治33）年に創業した老舗酒店で、現在の建物は創業者の竹内福蔵が、関東大震災で倒壊した際に建て替えたもの。若宮大路の沿道でもひときわ目を引く重厚な商店建築は、軒が大きく前面に張り出した伝統的な出桁造りが特徴。敷地の奥には蔵があるほか、店脇には酒を倉庫に運搬するためのトロッコとレールが残ります。

複雑に重なる屋根と長大な差し鴨居を備えた風格ある佇まい

鎌倉を深掘り

忘れがたい青春期を過ごした芥川龍之介

1892（明治25）年～1927（昭和2）年

東京帝国大学卒業後、作家になることを志し、横須賀の海軍機関学校で英語の教師をしていた芥川龍之介。1916（大正5）年～1917（大正6）年には海濱院ホテル近くの由比ガ浜に下宿し、1918（大正7）年から約1年間、元八幡近くの借家で新婚生活を送りました。俳人の高浜虚子ら鎌倉に住む文学者たちと親交を深めたこの時期は、『地獄変』『蜘蛛の糸』『奉教人の死』などを発表した充実期でもあり、当時の生活を綴った書簡も多く残っています。人気作家となった芥川は、その後東京・田端の家に戻りますが、次第に健康状態が悪化。自ら命を絶つ前年には、「鎌倉を引き上げたのは一生の誤りであった」と語ったといわれています。

新婚時代を過ごした鎌倉大町（現在の材木座）の書斎

1929（昭和4）年

櫺亭

深い緑と庭園に囲まれた鎌倉山のシンボル

昭和初期に高級住宅地として鎌倉山の分譲を行った菅原通済の父であり、鉄道事業家として知られる菅原恒覧の別荘だった建物。

本館の和洋折衷の重厚な日本家屋は横浜の養蚕農家から、玄関部は鎌倉手広にある青蓮寺（鎖大師）から移転改築しました。禅宗様意匠を取り入れた四脚門の山門は、鎌倉西御門にあった高松寺が宮城県に移転する際に移築したものです。本館と山門は国の登録有形文化財となっています。現在は、蕎麦・会席料理店として知られています。

和室と、ステンドグラスを飾る洋室が混交する和洋折衷の別荘建築

1929（昭和4）年

旧華頂宮邸

昭和初期の洋館とフランス式庭園を散策

緑深い衣張山東側にある、華頂博信侯爵邸として建てられた洋風住宅です。その後たびたび持ち主が変わり、1996（平成8）年に鎌倉市が取得しました。ヨーロッパの民家などに見られるハーフティンバー様式の建物で、柱・梁などが外部に現れる趣あふれる外観が特徴。樹木や池を幾何学的に配置した美しいフランス式庭園を併設し、季節の花を楽しみながら散策が楽しめます。また、敷地奥には1971（昭和46）年に、当時住んでいた松崎氏が東京・上大崎の自宅から門と茶室を移築した「無為庵」があり、旧華頂宮邸の建物内部と合わせて春・秋の数日間のみ一般公開されています。

往時の華やかな暮らしを彷彿とさせる洋館と幾何学式庭園

1929（昭和4）年

扇湖山荘

桜や紅葉が美しい庭園も見どころ

杉木立から望む相模湾が扇形の湖に見えることから名付けられた山荘は、製薬会社「ワカモト製薬」創業者の長尾欽彌が飛騨高山から移築・改築させた建物で、美しい日本庭園も圧巻。

母屋は木造2階、地下1階の構造。2階には接待用のサロンがあった

鎌倉を深掘り

鎌倉文士の前夜となった「文學界」

戦争の激化と社会不安、言論の弾圧、そしてプロレタリア文学作家・小林多喜二の虐殺。1933（昭和8）年、そんな時代背景のなか、小林秀雄、林房雄、川端康成、深田久弥らの文士たちは文芸復興を目指し、政治や党派性にとらわれない雑誌「文學界」を創刊しました。モダニズム文学で知られる新感覚派の川端や横光利一、フランス近代文学に影響を受けた小林や島木健作らプロレタリア文学からの転向組など、多様な文学の流れを映した雑誌には、文士の自由な気風と純粋な文学精神が宿っていました。川端は「編輯後記」で、「時あたかも、文学復興の萌あり」と書いています。

「文學界」創刊号。発行は文化公論社で、後に文藝春秋社に移った

1936（昭和11）年

鎌倉文学館（旧前田家鎌倉別邸）

鎌倉ゆかりの文学者たちの足跡を辿る

相模湾を一望する高台にある建物は、旧加賀藩前田家第16代当主・前田利為の別邸として建てられたもの。第二次世界大戦後には、デンマーク公使や佐藤栄作元首相が別荘として使用したほか、作家・三島由紀夫の小説『豊饒の海』の第1巻『春の雪』に登場する別荘のモデルにもなりました。その後は鎌倉市が譲り受け、1985（昭和60）年に鎌倉文学館として開館。初代館長は作家の永井龍男が務めました。国登録有形文化財である格調高い建物は、西洋の木造建築ハーフティンバー様式とスパニッシュ様式を基調とし、館内には華麗なアールデコの装飾が残っています。本館前には広大な庭園と美しいバラ園があり、季節には「鎌倉」「流鏑馬」など鎌倉ゆかりの名がついた珍しいバラも見どころです。※大規模改修のため休館中。

春のバラは5月中旬～6月下旬、
秋は10月中旬～11月下旬が見ごろ

文学者の足跡

佐藤栄作

1901（明治34）年～
1975（昭和50）年

第61～63代の内閣総理大臣を務め、1964（昭和39）年から旧前田家別邸を別荘として利用。3階のバルコニー（現在非公開）では、施政方針演説前日の夜中に演説の練習をしていたとか。鎌倉文士とも親交が深く、小林秀雄、永井龍男、川端康成らが訪れて共に食事をしたこともあったそうです。

文学者の足跡

三島由紀夫

1925（大正14）年～
1970（昭和45）年

川端康成の推薦で「煙草」を発表し、本格的に文壇に登場。以来二人は深い親交を結び、三島は長谷の川端家をたびたび訪問しました。作家の集い「鉢の木会」や文芸誌「聲」のメンバーとして中村光夫ほか鎌倉文士たちと交流。小説『春の雪』執筆のために旧前田家別邸を訪れています。

1936（昭和11）年

湯浅物産館

横浜の建物を模したレトロな“看板建築”

貝細工の製造加工・卸売店として1897（明治30）年創業。アーチ窓が印象的な建物は、関東大震災後の1936（昭和11）年に建てられたもので、木造建築の正面に洋風の装飾を施した「看板建築」の代表格。創業者の湯浅新三郎は、“火災に負けない頑丈な建物を”と、大工を横浜に連れていき、現地の貿易商社を模してつくらせたそうです。

現在も、カフェや着物スタジオなどの店舗が営業している

鎌倉を深掘り

別荘族も愛用した伝統的工芸品「鎌倉彫」

カツラなどから形成した木地に繊細な文様を彫り、漆を塗って仕上げる

「鎌倉彫」は、13世紀に宋から伝わった法具などの美術工芸品が祖といわれ、鎌倉時代から仏像や仏具などを製作していた仏師たちが、明治時代のニーズに合わせて家具や調度品の製作を始め、現在の鎌倉彫へと発展しました。

その伝統を今に伝える老舗があります。

由比ガ浜通りにある「寸松堂」は、1936（昭和11）年、彫師・佐藤宗岳の店舗併用住宅として、市内の大工・西井喜一、正二親子によって建てられました。1階店舗部分のガラス戸、ショーウインドーなどに近代洋風建築技術が見られますが、全体としては寺院建築と城郭建築を合体させたような建物となっています。頂部に相輪を頂く、笹目町、長谷界隈のランドマークとなっています。

寸松堂

白日堂

長谷にある「白日堂」は、伊志良不説の創業。1940（昭和15年）頃に建てられた工房兼住宅です。桟瓦葺き入母屋（一方は切妻）屋根をもつ、城郭風と寺院風が融合した重厚な意匠に加え、鉄平石張りの腰壁付きのショーウインドーという近代的な要素が相まって、独特な雰囲気を醸し出しています。

江ノ電・和田塚駅そばにある「伝統鎌倉彫事業協同組合・鎌倉彫工芸館」では、鎌倉彫について詳しく知ることができ、また鎌倉彫の体験をすることができます。

1938（昭和13）年

ぼんぼり（雪洞）祭

幻想的な雰囲気に包まれる鎌倉の風物詩

鶴岡八幡宮では、８月の立秋の前日に「夏越祭」、立秋当日に「立秋祭」、源実朝の生誕日の８月９日に「実朝祭」を執り行い、この期間に境内にぼんぼりを掲揚します。夕暮れになると、鎌倉にゆかりのある文化人・著名人が描いた約400点のぼんぼりに灯がともり、境内は幻想的な雰囲気に包まれます。

太鼓橋から上宮まで光の道が広がり、夜まで多くの人でにぎわう

夏の鎌倉は海水浴客で賑わいましたが、神社仏閣を訪れる人は多くありませんでした。海水浴客に鎌倉の文化にも親しんでもらおうと、鎌倉文士らの協力を仰ぎ、ぼんぼり祭が始まりました。作家の永井龍男は、祭りの様子を作品に描いています。

鎌倉を深掘り

鎌倉が熱狂！文士がつくった夏の風物詩「鎌倉カーニバル」

1934（昭和9）年7月、南フランス・ニースの謝肉祭（カーニバル）に感銘を受けた久米正雄と、大佛次郎らが中心となり、「第1回鎌倉カーニバル」を開催。戦中～戦後すぐの8年間を除き、1962（昭和37）年まで続いた一大イベントは、毎年その年の巨大な主神をつくり、ともに若宮大路から由比ガ浜海岸に向けて仮装パレードするもので、龍神、金太郎、オードリー・ヘプバーン、力道山などユニークな主神が祀られました。見物客の数は年々拡大し、鎌倉は全国的に「海の銀座」と呼ばれるようになりました。戦後1947（昭和22）年に復活した際は、ミス・カーニバルや浴衣コンテスト、ダンスをはじめ、さまざまな催しとともにパワーアップ。当時8万人の市に20万人が集まる大盛況になりました。斬新な衣装でパレードを楽しむ横山隆一ら漫画家集団、ミス・カーニバルコンテストの審査をする川端康成。何よりも文士自身が楽しむ様子が記録や作品に残るイベントは、鎌倉のまちを明るくし、人々を笑顔にしたのです。

若宮大路のビッグパレード。全国から見物客が押し寄せた

1961（昭和36）年

旧川喜多邸別邸（旧和辻邸）

海外との懸け橋となった映画人の別邸

戦前から戦後にかけて、『自由を我等に』『天井桟敷の人々』『第三の男』ほか数多くのヨーロッパ映画の名作を輸入・配給し、戦後は、国際映画祭を通して日本映画を積極的に海外に紹介した「東和商事」（現在の東宝東和）の創設者・川喜多長政、かしこ夫妻の別邸です。山と黒い板塀に囲まれた桟瓦葺き屋根の和風建築は、東京にあった哲学者・和辻哲郎の住宅を1961（昭和36）年に移築したもので、もとは神奈川・大山の古民家だったそうです。国際人だった夫妻は、この別邸を海外から訪れる映画監督やスターを迎える場として活用しました。東側の母屋は整備され、現在は「鎌倉市川喜多映画記念館」となっています。

内部には土間や居間、書斎などがあり、春と秋に一般公開される

鎌倉を深掘り

“小津調”の記念碑的名作『晩春』

1936（昭和11）年には松竹撮影所が蒲田から大船に移り、映画産業が盛んになった鎌倉。没年まで山ノ内に住んだ小津安二郎監督は、1949（昭和24）年に『晩春』、1951（昭和26）年に『麦秋』など、鎌倉を舞台とした作品を残しています。なかでも鎌倉に暮らす父と娘の親子愛を描いた『晩春』では、北鎌倉駅や鶴岡八幡宮が登場。独自の“小津調”と呼ばれる映像表現を確立した映画として、国内外から高い評価を得ています。

小津安二郎　1903（明治36）年～1963（昭和38）年
東京出身。1923（大正12）年に松竹キネマ蒲田撮影所に入社し、後に鎌倉へ。里見弴や大佛次郎ら鎌倉文士と親しく交友した。

1962（昭和37）年

吉屋信子記念館

鎌倉を代表する女性作家が暮らした家

鎌倉は優れた女性作家も活躍してきましたが、その代表といえるのが、少女小説から家庭小説、『徳川の夫人たち』などの歴史小説まで幅広く活躍した吉屋信子です。東京の喧騒を逃れ、よりよい執筆環境を求め、吉屋が66歳のときにこの地に居を構えました。閑静な住宅街にある平屋建ての母屋は、近代数寄屋建築の第一人者である吉田五十八が設計したもので、吉屋は「奈良の尼寺のように」と依頼したと伝えられています。現在は鎌倉市に寄贈され、市民の学習施設として親しまれています。また毎年春と秋には一般公開が行われ、当時のままに保存されている書斎や居間、直筆原稿等の展示を見ることができます。

吉屋信子
1896（明治29）年～
1973（昭和48）年
断髪、洋装のモダンガールだった吉屋は「少女画報」に連載した「花物語」で、当時の女学生の心を魅了した。少女小説から歴史小説まで常に女性の視点で作品を描いた

鎌倉を深掘り

日本初のナショナル・トラスト運動

高度経済成長を迎えた1964（昭和39）年、鶴岡八幡宮裏の御谷に宅地造成計画が持ち上がりました。これに対して、地元住民を中心に、市民や大佛次郎らの文化人などが、署名や募金など反対運動を推進しました。このとき設立された鎌倉風致保存会が、集まった寄付金で宅地造成予定地の一部を買収し、事業者は計画を断念しました。

この「御谷騒動」は、日本初のナショナル・トラスト運動となりました。この運動が契機となって、1966（昭和41）年には「古都保存法（古都における歴史的風土の保存に関する特別措置法）」が制定され、鎌倉は乱開発から守られることとなりました。

当時の御谷の森。
鶴岡八幡宮の裏山にあり、重要な史跡が残る